

研究助成（2009年度募集）研究実績報告書

代表研究者	関西大学社会安全学部 准教授 菅 磨志保
研究テーマ	「大規模交通災害現場において救助活動に参加した市民の惨事ストレスに関する実態調査並びにケアツールの開発

< 助成研究の要旨 >

【研究の着想に至った背景と目的】

大規模災害・事故の現場で救助活動を行なう市民は惨事ストレスを受けている筈であるが、この問題に対する継時的な調査は殆ど行なわれておらず、ストレスケアの必要性も十分に認識されていない。

そこで、本研究では、大規模交通災害などの惨事現場で救助活動に参加した一般市民のメンタルなリスクに関する実態を把握し、リスクを軽減するためのストレスケア・ツールを作成した。またこのツールの作成の過程ではストレスケアのプログラムも実施し、実践的研究の方策についても検討を行なった。

【研究の具体的な方法と内容】

国内外における先行事例（大規模交通災害時に救助活動を実施した事例、その救助に関わった市民のストレスケアの事例）に関する文献収集と現地訪問による聴取調査を行なった。

この調査結果および専門家の助言に基づき、大規模交通災害時に救助活動を実施する市民に、活動の直後に手渡すことができるストレスケア・リーフレットを作成した。

福知山線列車事故の支援者に対して、専門家によるケアプログラムと、試作したリーフレットに対する意見聴取を実施し、その意義・効果を検証して成果物（リーフレット）を完成させ、さらにリーフレットによるケアだけでは解消できない課題を抽出・整理した。

【研究の結果と成果】

終了後に行なった専門家との協議、参加者へのアンケート結果の分析、専門家を招いた研究会議でのプログラムの批判的検証などを通じて、以下の課題が明らかになった。

支援者同士で症状を認識・共有する場がないのでケアが必要な症状が潜在化しやすい

専門家による症状の発見が遅れるほど対応が困難になる

災害直後のストレス対応が効果的だが、対応主体を誰にするが重要である

事後対応だけでなく、事前の防災・安全も含めた教育プログラムが必要

また、自然災害後に活動するボランティアのフィジカルな問題を検討するために確立させてきた実践的研究の方策を、今回の研究を通じて、人為災害後のメンタルな問題に関する実践的研究方法にも援用することができた。さらにここで培ってきた実態調査とケア実践を連携させた研究手法は、隣接するテーマへの応用可能性も高いといえる。これらも含めて、将来的には「大規模交通災害時の活動ガイドライン」の作成を目指しているが、本研究を通じて、その基盤作りを行うことができたと考えている。

【今後の課題】

実践的課題：救助活動に参加した当事者が惨事ストレスについて話し合える場づくりと、その場を支える専門家の必要性（上述の課題 の対応）

社会的提案に向けた課題：事故直後にリーフレットを手渡し、リスクについて説明する社会的な主体をどこに設定するかを検討（ 上述の課題 に対応）

研究課題：事故に関わる多様な主体（犠牲者・遺族・周辺地域住民、プロの救援者・一般市民の救援者、加害者等）の問題への関わり方、主体間の関係性を整理し、それぞれどのような心身の問題を抱えているのかを把握すること、また、それぞれの主体に対する社会的な対応の在り方についての検討（ 上述の課題 に対応）